

きぼうのめがね

小 四

みなさんは、ピーマンが何色に見えますか。

ぼくには、うす茶色に見えます。色がふつうの人とちがって見えるのです。緑色がうす茶色みたいに、ピンク色がはい色みたいに、むらさき色もはい色みたいに見えるのです。また、にたような色でかかれた絵は、一つの色にしが見えませんか。

二年生のとき、生活科のじゅ業でピーマンを育てました。その観察日記で、ぼくはピーマンの色を茶色でぬったのです。それを見たお母さんが、

「なんで茶色なの。」

と聞いてきました。ぼくは、緑色でぬっていたら思っていたので、「何を言っているんだらう。」と思いました。

「それ何色。」

と聞かれたぼくは、

「緑。」

と答えました。緑色の色えんぴつを持ったお母さんが、不思議そうな顔で、「これは何色。」

と聞いてきました。ぼくは、自信満々に、

「茶色。」

と答えました。ぼくの目は見え方がちがうということが分かったしゅん間でした。一年生のときに、どんぐりを緑色でぬった観察日記も見つかり、前か

らずつとそうだったことも分かりました。

眼科^{がん}に行つて、本の中に書いてある数字を言ったり、にた色をならべるけんさをしたりしたら、「色覚いじょう」と言われました。ちがう病院に行つても、結果は同じでした。みんなと同じように見えている色は、白・黄・赤だけでした。今まで絵をかくにも、じゆ業を受けるにも、何もこまっていなかつたので、おどろきました。

でも、一つだけとてもこまつたことがあります。大きくなつたらけい察官になりたいというゆめがあつたのです。毎日、地いきの人たちに見守られながら学校に通っているので、ぼくも、ぼくたちの町の安全を守りたいと思つ

ていたのです。しかし、色覚いじょうの人には大きくなつたらなれないしよく業があることを知りました。なんと、それはぼくがなりたいと思つていたけい察官でした。ゆめがかなわないことが分かつたとき、悲しくて、くやしかつたです。「みんなと同じように、見えないう色が見たい、見てみたい。」と、強く思うようになりました。

そんなある日、ぼくは「まほうのめがね」に出会いました。そのめがねをかけると、新しい色でそめられたあざやかな景色が、辺り一面に広がつたのです。「みんな、こんなにぎやかで明るい世界で生活しているんだ。いいなあ。」と心から思いました。けい察官になるというゆめをあきらめられなかつ

たぼくは、「このめがねがあれば、ゆめ
がかなうかもしれない。」と思いました。
ぼくは、どうしてもみんなと同じ世
界を見たいとお母さんをお願いをして、
「まほうのめがね」を買ってもらいま
した。後からそれは「色覚ほ正めがね」
というものだと言われ、まほうでは
ないことを知りました。それでも、み
んなの目に一歩近づけたような気がし
て、「まほうのめがね」は、「きぼうの
めがね」になりました。新しい色の世
界を手に入れることができたのです。
本当にうれしかったです。

色が見えていた自分は、他の人が体験
できないことを体験していたんだと思
えたからです。すると、かたがすうつ
と軽くなりました。そして、自分にし
かできないことがあるのではないかと
思えるようになったのです。今、それ
が分かったからこそ、前向きに考えら
れるようになりました。
通っていた眼科の先生にも、
「今、気がついてよかったね。」
と言われました。ぼくはその通りだと
思いました。なぜなら、今分かったこ
とで、新しくゆめを見つけることがで
きるからです。
そして、ぼくには新しいゆめができ
ました。それは、学校の先生になるこ
とです。地いきの人に見守ってもらっ

た感しやの気持ちをも、先生として子どもたちに伝えていきたいと思っただけです。ぼくのように、特ちょうのある人もいるかもしれせん。おたがいに助け合って生きていくことの大切さを教えられる先生になりたいです。

ぼくには、みんなと同じようには見えない色もあります。でも、この特別な目は、ぼくに新しいゆめをあたえてくれました。この体験をわすれずに、これからいろいろなことにちよう戦していきたいです。